

# 韓南学堂について

—旧韓末「日語学校」の一事例—

稲葉 継雄

## はじめに

日清戦争（明治27～28年）から日韓併合（明治43年）にかけての旧韓末教育史の一翼を担った「日語学校」は、統計的に明らかにされているものだけで34校を数える。その設立主体別内訳は、韓国政府2校、東亜同文会3校、大日本海外教育会2校、東本願寺4校、その他民間立17校、不詳6校であり、時期区分を、明治31年以前を第一期、東亜同文会の活動開始（明治32年）から日露戦争終結（明治38年）までを第二期、それ以後併合までを第三期とすると、第一期に6校、第二期に23校、第三期に5校が設立されている。

本稿で取上げる韓南学堂は、明治31年10月、薬師寺知麿によって設立された日語学校である。つまりこの学堂は、ひとりの民間日本人によって、日語学校としては最も早い時期に開設されたのである。

ところで、個々の日語学校、とくにそれほど有名でなかった小規模学校については、これまで全くといってよいほど研究がなされていない。それは、一にかかって資料の不足に起因するが、筆者は最近、幸いにして『東亜時論』と『東亜同文会報告』のほとんどを入手することができた。これはいずれも東亜同文会発行の雑誌で、同会が韓南学堂を補助したところから、韓南学堂が随時その教育活動の状況を報告した内容がこれらの資料の中に含まれているのである。本稿は、これにほぼ全面的に依拠することによって初めて可能になったものであるが、その意味で逆に資料的偏りは避け難い。

## 1. 沿革

韓南学堂があったのは、忠清南道恩津郡江景浦（現、論山郡江景邑）である。（資料によっては「江鏡」としているものもあるが、本稿では引用文を除き「江景」とする。）江景は、錦江の中流に位置し、人口こそそれほど多くなかったも

の（明治33年末当時で約5,000人）、水陸交通の要衝として古くから有名な所であった。この地に日本人行商人が初めて足を踏み入れたのは明治24年の頃であったといわれるが、日清戦争が日本の勝利に帰した後も、住民の対日感情は決してよくはなかった。韓南学堂堂主薬師寺知臈は、当時の民情を次のように報じている。

錦江流域の人民は性質頑迷にして奸智に長じ古より排外の思想盛んにして少くとも外人を輕視侮蔑するの風あるは彼の排外を名とせる暴民の屢々此地方に蜂起するの事實に激するも知る可きなり斯の如き所以のものは彼等の暗愚にして事理を辨ぜざるに依るべしと雖も外人との交通極て稀にして外人の勢力を認識し其真相を熟知するの機會に接せざるもの亦た一因たらずんばあらずれば此地方に於ける我が少數行商者の如きは常に彼等の輕視侮蔑を受けて屢々堪へ難き困難に遭遇し嘗て彼等の間に些少の威信だに保ち得ざるの状態にてありき<sup>1)</sup>

したがって韓南学堂の目的は、このような「韓國の内地を啓發し以て聊か隣邦の文化に資せんとする」<sup>2)</sup> ところにあつたのである。

薬師寺知臈が韓南学堂の創立準備に着手したのは、明治31年9月のことである。ところで薬師寺は、明治29年9月25日付の『基督教新聞』に「万寿節の大祈禱会」と題する京城発の記事を載せている<sup>3)</sup>。これによって、彼がすでに明治29年から韓国に滞在し、キリスト教徒として活動していたことが明らかであると同時に、その頃から日語学校開設の機を窺っていたであろうことが推察される。韓南学堂開設の直接の契機となったのは、仁川居留日本官民の協力、なかなづく仁川領事石井菊次郎の尽力であつた<sup>4)</sup>。

明治31年10月7日、韓南学堂は開校式を挙げた。しかし、財政貧困のためなんらの設備とてなく、民家の一部を賃借して校舍に充て数名の生徒に対して日本語を教授するにすぎなかつた。

このような状況を打開する一方策として薬師寺は、同年11月下旬、父兄の希望を容れて漢文科を特設することとした。このとき雇われたのが、その数年前から書堂の教師をしていた任泰鎬で、彼は、門下生10余名とともに韓南学堂の一員となつた。同年12月21日、漢文科が正式に開設され、任泰鎬が副教師としてこれを担当、従来の生徒にも漢文兼修の道が開かれた。漢文科は、日本語専攻の生徒およびその父兄にも概して好評であり、同時に生徒数増加の契機ともなつた。換言すれば、韓南学堂にとって漢文科は、当時の韓国社会の教育要求に応じ、より多くの生徒を集めるための方策だったのである。

続いて、韓南学堂基盤拡充策の第二弾として明治32年1月、堂主自ら付近数里の間を往来する「巡回訪問」が開始された。これに類する手立てとしてその後「講話会」「印刷物配布」なども実施され、これらを通じて韓南学堂は、その影響力を校外にも及ぼしていったのである。明治33年12月末の「韓南学堂報告」によれば、巡回訪問・講話会・印刷物配布の具体的内容は次のとおりである。

本校に於ては前記の如き校内教育の外巡回訪問講話会及び印刷物配布等の方法を設く巡回訪問は地方に定住せる有力者を開導するの目的を以て昨年一月より開始せるものにして毎月二回づゝ附近の各地を巡回し官吏兩班富豪長老及び其他有志者を歴訪して親交を結び或は座談に依り或は印刷物に依りて彼等を啓發するに在り其巡回區域は江鏡を中心として恩津、連山、魯城、石城、扶餘、林川（以上忠清道）彌山、龍安、咸祝（以上全羅道）等の數郡に亘れり講話會は毎週凡そ一回校内に於て來訪者及び生徒に對し教育上に關する講義又は談話を爲すものにして印刷物配布は校の内外に向つて冊子新聞紙等を配布して教化の一助に供するものなり其今日迄に配布したるは大東合邦論、日語獨學、漢城月報及び該文漢城新報等にして昨年中に五百餘部、本年中に三百餘部なりとす以上の方法は地方人民を開導啓發するに頗る有効にして開始以來之れが爲めに各地の官民屢々本校に來訪し且つ我れに對するに厚意を以てし甚だ好結果を奏しつゝあり<sup>9)</sup>

漢文科の特設や巡回訪問の開始などによって江景一帯における学堂の評価が高まり、生徒数も次第に増加したため、従来の校舎は狹隘を告ぐるに至った。折よく、父兄の中に全羅南道樂安郡守徐玉淳の所有する家屋敷を斡旋する者があり、管理人の好意によって無料で借用することができたので、明治32年3月11日、韓南学堂はここに移転した。しかし、これによって校舎問題が完全に解決されたわけではない。当時の状況を同年7月の『東亞時論』は、「校舎の位置は適當なれども元と住屋を假用せるものにして教室狹隘なれば漢文科の外は一室に於て交代授業し其不便實に甚しく而かも生徒の過半は此内に宿泊し教室は時に寄宿舎となり時に食堂となり或は自習室或は談話室となるの奇觀を呈せり」<sup>6)</sup>と報じている。

そこで薬師寺は、校舎増築の計画を立て、明治33年1月、そのための義捐金募集に着手した。ところで、これに先立つ明治32年5月群山が開港され、日本人の来往居住する者ますます増加するとともに、同年9月には全州に三南学堂が、33年1月には公州に湖西学堂が設立されていた。つまり、韓南学堂を中心としてこれらの日語学校が鼎立する状況になっていたのである。したがって韓

南学堂の校舎増築計画は、三南・湖西両学堂の台頭に対抗する意味もあったであろうし、また群山開港に伴う日本人の増加は、同計画の推進を容易にしたであろう。

義捐金募集のための薬師寺の足は、仁川・京城・群山・木浦・鎮南浦・平壤・開城などに及び、これら各地居留の日本官民有志が抛出した金は1,223円余にのぼった。資金募集が一段落するや薬師寺は、当初の予定どおり従来の校舎を買上げようと、家主との間に交渉を重ねた。だが、この話は結局成立せず、そのためやむなく1,100余坪の土地を新たに購入し、2棟の校舎を新築することになった。新築工事の着手は明治33年7月13日、竣工は11月15日のことであった。

韓南学堂校舎新築直前の6月23日、東亜同文会は、韓南学堂への月額40円の補助を決定した。このことについては、次章で改めて述べる。

明治34年12月、第1回卒業試験が行われた。ただし、この試験の対象は明確でない。というのは、韓南学堂発足当時の堂則によれば学科の構成は本科と小学科で、修業年限は本科が3年、小学科が5年であったが(第五条)、明治34年12月末の韓南学堂から東亜同文会への報告によれば、学科は「普通科小學科の二部とし別に附屬漢文科を置く」とあり、修業年限は、普通科・小学科ともに3年とされている<sup>7)</sup>からである。したがって、学堂発足から3年を経た34年12月の時点では、本科を改称した普通科の生徒のみならず、修業年限短縮後の小学科の生徒にもそれぞれ卒業試験受験資格があったことになる。しかし、このときの韓南学堂報告の記述内容が次のとおりであるところからすると、普通科の3年生のみが受験したとみるのが妥当であろう。

第一回卒業試験及補習科の新設 本年十二月第一回卒業試験を執行し五名の合格者ありたり(卒業式は明春執行の筈)是等の生徒は開校以來不完全なる設備の中に修業したる者にして未だ充分に規定の學科を履修し得ざる者もあり且何れも修學を繼續せんとの希望あるにより明年よりは更に補習科を新設して之れを收容せん豫定なり<sup>8)</sup>

ともあれ、第1回卒業試験には5名が合格し、明治35年春、卒業式が行われたようである。そして同時に、彼らの修学継続のため補習科が新設されたものと思われる。

ここで学科の構成について補足すると、韓南学堂には、本科(普通科)・小学科・漢文科・補習科のほか特別科なるものがあつた。特別科は、在留日本人子

弟を対象とし、父兄の要望に応じて随時開設された。これに関しては次のような記録がある。

特別科は在留日本人子弟の爲めに特設したるものなれども現今學齡兒童なきを以て其授業を中止し居れり<sup>9)</sup>

それからコーケーといふ所に日本人が四十八人か居りました、其處に學齡兒童が三人居りました、其二人は女で一人は男である、其處に韓南學堂といふのがありまして、其處の校長の妻君が預つて三人の子供を教へて居る<sup>10)</sup>

在留民の兒童は學校に通學して（韓南學堂にて韓人教育の傍ら日本人兒童の教育をも爲しつつあり）路上には着袴せる學生往來するを見……<sup>11)</sup>

在留民ノ増加ニ連レテ學齡兒童増加シ來レルモ從來小學校ノ設置ナカリシヲ以テ便宜上本學堂ニ於テ韓人教育ノ傍ラ本邦兒童ノ爲ニ教鞭ヲ執リツ、アリシガ過般淨土宗ニ於テ布教ニ着手シ傍ラ本邦兒童教育ヲ開始スルコトナリ本學堂ヨリ引繼ギ同宗ノ假寺院内ニ於テ教授ヲ開始スルコト相成候<sup>12)</sup>、

明治38年秋、日露戦争勝利の影響であろうか、江景北方約3里の論山で日語學校設立の動きが具体化し、韓人有志から韓南學堂に助力を要請してきた。元々韓南學堂としても同地に分校を設置する計画があったので、この交渉はとんとん拍子にまとまり、38年12月27日、韓南學堂分校魯城論山忠仁學校が開設された。韓南學堂は、この分校の一部費用を補助するとともに、分校の日本人教員が着任するまで出張授業の形で教育活動を援助した。この間の経緯は次のとおりである。

忠清南道魯城郡論山（ノルミ）ノ韓人有力者尹滋聖、金鐘振等同意ニ日語學校ヲ設立スルノ希望ヲ以テ昨秋來屢々本學堂ニ交渉シ來リ候處同地ハ本學堂分校設置豫定地ナリシヲ以テ其交渉ニ應ジ彌々分校トシテ設立スルコトニ決定シ既ニ舊臘二十七日ヲ以テ開校式ヲ舉行シ本月四日ヨリ授業ヲ開始致候校名ハ韓南學堂分校魯城論山忠仁學校ト稱シ校舍ハ六一亭ト呼ベル舊射亭ノ建築物ヲ修繕シテ之レニ充テ經費ハ同地有志團體ニ於テ實費額ヲ負擔シ間接ニ要スル費用ハ凡テ本學堂ニ於テ補助スルコトニ協定致候生徒ハ目下幼年生六名青年生十四名合計二十名有之教員ハ本邦ヨリ一名招聘スル筈ニシテ既ニ照會中ナレバ其着任迄ハ本學堂ヨリ交々出張授業致居候<sup>13)</sup>

このように韓南学堂は論山にまで勢力を伸ばし、いよいよ隆盛に向う感があった。しかし、韓国保護条約の締結（明治38年11月）、統監府の開庁（39年2月）に伴い明治39年4月、東亜同文会が韓国から手を引くことになり、それまで同会から韓南学堂に与えられていた月額40円の補助金も打切られた。これ以降、統監府がこの補助金を肩代りし、韓南学堂が翌40年2月まで存続したことは当時の「東亜同文会一覧表」によって明らかであるが、その後の消息は定かでない。

## 2. 財政状況

韓南学堂は、薬師寺知麗が個人の資格で設立した学校であったので、当初から資金というべきものはなかった。その創立にあたって仁川居留日本官民の援助、とくに仁川領事石井菊次郎の尽力に大きく依存したことは前述のとおりである。したがって、薬師寺としては他力本願を財政維持の基本方針とせざるをえず、これを「韓南学堂々則」の筆頭に謳うことになった。堂則第一条は、「本学堂は日韓兩國篤志家の義捐金を以て維持す」という内容である。

しかも、学校といえば即、旧来の書堂を意味し、日本語および普通学を教授する日語学校の拠って立つ基盤がほとんどなかった明治31年当時の江景においては、入学金・授業料等を徴収することは思いもよらず、生徒募集のためには逆に学用品や奨学金を給付する必要があった。これを明文化したのが堂則第三条（本学堂は凡て東修月謝等を徴収せず生徒には修業中必要の書籍筆紙墨等を給與又は貸與し成績優等の者には賞品又は奨学金を授與することあるべし）であるが、これが、韓南学堂の財政をさらに圧迫するところとなった。薬師寺は、京城の官立学校の例に倣って、できれば昼食まで給したかったようである。しかし、それは所詮無理な話であった。

明治32年3月、それまで民家の一部を賃借していた校舎は、父兄有志の斡旋により全羅南道楽安郡守徐玉淳の家屋敷を無料で借入れ移転することができた。これによって家賃の分だけは楽になったわけであるが、それでも当時の施設・設備の状況は、次のように惨憺たるものであった。

校舎は敷地共韓人より一時借入れ使用せるものなり其位置は眺望佳き高燥の地にして敷地の廣さ約我一千坪あり校舎は三棟の韓屋より成り其一棟は廣さ四間（一間は我八尺平方）之を教師の居宅に充て他の二棟は各二間半之れを教室に供し其一は漢文科教室に専用せり故に教室は頗る狭隘を極め授業上の不便實に尠ならず

教授用の器具書籍等は唯だ僅に塗板、座机及生徒用の書籍、文具あるのみにして未だ學校の設備としては見る可からず校舎及校内諸般の設備を完成することは目下に切要を感ずる所なるも如何せん費用支へず已む無く斯かる状態にて執業し居れり<sup>14)</sup>

前述したように明治33年1月、薬師寺知躰は校舎増改築のための寄付金募集を開始し、途中で増改築から新築に計画を変更して7月に着工、11月に竣工した。韓国各地の在留日本官民から集めた寄付金は計1,223円余、しかして要した費用は、地所購入費・校舎建築費・備品費その他を合せて1,372円に上り、予算に対して148円余の赤字を出した。この校舎新築工事の着工と時を同じくして東亜同文会から毎月40円の補助が開始されているが、この補助は、暫くの間新築費補填のために相殺され、韓南学堂の財政難解消には直接貢献しなかったと思われる。それゆえであろうか韓南学堂は、明治33年からなるべく生徒に学用品を自弁せしめる方針をとっている。次の資料は、明治34年末の韓南学堂報告の一節である。

月謝及修業用品 本学堂は凡て就學者に向つて東修月謝の類を課徴せざるのみならず修業中必要の書籍筆紙墨等の一切を給與す蓋し當國の如き學事思想の幼稚なる國に於ては特に資を投じて就學する者としては極めて稀なれば勢ひ斯の方法に依らざる可からず京城に於ける諸官立學校が食事までも給するものあるに徴すれば此一事は思ひ半ばに過ぐるものあらん去れど本学堂に於ては昨年以來成るべく生徒をして修業用品を自辦せしむるの風を作るに勉め漸次此傾向あるを認めつゝあり<sup>15)</sup>

学用品の生徒自弁は、学堂の財政負担軽減の一方途であったことは事実であるが、しかし、単にそれだけの意味をもつものではない。当初、学用品一切を給与しなければならなかった韓南学堂が、明治33年に至って、これなくしても生徒を集められるようになったということであり、それだけ江景の地に根を降ろした証明でもある。

ところで、東亜同文会は、明治32年4月以来城津学堂と平壤日語學校を自ら経営する傍ら京城学堂に年額1,200円の補助金を出していたが、同会仁川支部の勧告に基づいて翌33年度からは韓南学堂をも補助対象とすることになった。32年12月に策定された東亜同文会明治33年度（第1次）予算案において韓南学堂補助費1,200円が計上されたのが、最初の具体的措置である。しかし、前年度の2倍の総額80,000円を前提としたこの予算案は、東亜同文会への外務省機密費の倍増が結局実現せず前年どおり40,000円とされたため、33年2月に

なって全面修正され、韓南学堂補助費も480円(月額40円)に削減された。しかも、この予算における新規事業は実地調査の結果を待って着手する方針であったので、実際の執行はかなり遅れ、最終的に決定されたのは、33年6月23日の東亜同文会幹事会においてであった。当時の『東亜同文会報告』によれば、韓南学堂補助の理由は次のとおりである。

韓南学堂は韓國忠清道江景にあり薬師寺知麗氏韓人教化の目的を以て昨三十一年九月創めて設立したるものなるが爾來同氏の苦心經營に依り日に隆盛に赴き今や生徒三十名以上に達し修業の成績も頗る良好にして創立後日淺しと雖とも其上級生は既に日語日文及算數等の初歩を習得するに至れり堂主薬師寺氏は助教二人と共に熱心學生教化の任に當るのみならず度々附近各地に往來して所在の兩班富豪有志を歴訪し親密なる交誼を訂し以て一般韓人の教導に勉め來りしか其結果も頗る良好なり唯だ同校は維持費甚だ乏しく意の如く事業を進むる能はず設備亦た不完全にして教室は時に寄宿舎となり時に食堂となり或は自習室或は談話室に化するの奇觀を呈し満足に教授する能はざるは我人共に遺憾とする所なり今般本會は同校の有望なるを思ひその設備を完成し以て韓國人心開拓の實効を擧げしめんとし月々金四十圓を補助することとせり<sup>16)</sup>

こうして明治33年7月以後、東亜同文会から月額40円の補助が開始され、これは、39年4月、同会が韓国から撤収するまで継続された。また、韓南学堂への個人的な寄付も断続的に行われ、明治33年12月末現在、「開校以來一個人として本校へ金品を寄附せられたるもの八十八名此金員壹百七拾七圓四拾錢、物品五百七十五件に及」んだという<sup>17)</sup>。

しかし、これら東亜同文会の補助や個人的な寄付は、韓南学堂の財政事情を大幅に好転させるものとはならなかった。それは、韓南学堂がその後も引続き施設・設備の不備を訴えているところから明らかである。そこで韓南学堂は、明治37年3月、やむなく次のような「經濟の獨立を計るべき方針」を立てるに至った。

經費未だ充分ならざれば所期の如き學堂の整理擴張困難に候へば將來は是非共經濟の獨立を計るべき方針を立て居り候即ち資本家の投資を得て確實にして有望なる農商業を學堂自ら經營し其利益の一部を以て經費に充つべき考案に御座候<sup>18)</sup>

ただし、この企図がどのように進展したかは不明である。その後の『東亜同文会報告』にも韓南学堂の自立策が成功したという情報が全くないところをみ



ると、恐らく計画倒れに終わったのではないかとと思われる。

### 3. 教師・生徒の動向

明治31年10月の韓南学堂開校当時、教員は薬師寺知臈唯一人であり、薬師寺は、以後も一貫して韓南学堂の堂主兼主任教員であり続けた。韓南学堂は、薬師寺のワンマン経営の学校であったといっても過言ではない。

とはいえ、当然のことながら薬師寺は、教育活動を展開するにあたって韓国人通訳の助力を必要とした。その通訳の名は王龍植で、彼は官立仁川日語学校の出身であった。韓南学堂の開設が仁川居留日本官民の援助によるものであったことは前述したとおりであるが、その援助は、財政面のみならず通訳王龍植の紹介まで含んでいたようである。

開校1ヶ月余を経た11月下旬、父兄の要望によって漢文科が特設され、任泰鎬が副教師として採用された。任泰鎬は、漢文科生（すなわち小学科生中の漢文修学希望者）に韓国古来の書堂式教育を施した。

その後明治32年7月当時の職員構成は次のとおりである<sup>19)</sup>。

堂主	薬師寺知臈
教師 本科小学科擔任	同 人
副教師 漢文擔任	任 泰 鎬
通詞兼助教 通辦及本科、小学科ノ授業補佐仁川日語學校出身	王 龍 植
接長兼助教 生徒取締及小学科ノ授業補佐本科生	徐 相 文

これによれば、王龍植が通詞兼助教となっており、また接長兼助教として徐相文が加わっている。ただし、王が助教を兼ねるようになった時期、徐が助教に採用された時期は、いずれも定かでない<sup>20)</sup>。徐相文は、明治33年末当時「本科三年生にして生徒中の年長者」であった<sup>21)</sup>。だとすれば、助教採用当時は本科1年生で、年齢は、後述するところから推して30歳前後だったことになる。

明治34年10月15日、副教師任泰鎬辞任につき、後任として李昌旭が雇用された。この時点で、他の職員の異動はない。しかし、34年度に入って従来の本科が普通科と改称されるに伴い、各科の担任に多少の変動があったようである。34年12月末の韓南学堂報告は、当時の職務分掌を「普通科は教師及助手一名之を擔任し小学科は助手一名にて之れに當り……漢文科は副教師の擔當するところにして」云々と報じている<sup>22)</sup>。すなわち、それまで本科と小学科を担任してきた薬師寺が普通科だけを受け持つようになり、小学科は、韓国人助手(助教)

がひとりで担当することになったのである。2人の助手の分担は、その経歴からみて普通科が王龍植、小学科が徐相文だったであろう。

明治38年1月14日付で韓南学堂から東亜同文会に送られた「江景通信」によれば、この時の教員は、「堂長ノ外日韓人各二名」となっている<sup>23)</sup>。この日本人2名のうち1名は、薬師寺の妻君ではないかと思われる。先にみたように韓南学堂には日本人子弟のための特別科が設置され、これを薬師寺夫人が担当していたからである（註10参照）。もうひとりの日本人教員が誰であったか明らかでないが、いずれにせよ、開校以来薬師寺だけであった日本人教員が都合3名となったことは、職員構成の上で大きな変化であった。一方、韓国人教員は、日本人に取って代られた形でそれまでの3名から2名に減じている。漢文科担当の副教師は日本人による代替がきかなかつたであろうから、減員されたのは、恐らく助手のうちのひとりであろう。

次に生徒数の推移をみてみよう。韓南学堂開設当初、生徒は僅か6名であった。これを薬師寺が、王龍植の通訳を通して教育したわけで、韓南学堂は、まさに寺子屋そのものの小規模学校であった。

明治31年12月には、生徒数が一挙に20余名に増加した。これは、漢文科の開設に伴うもので、副教師任泰鎬がそれまで書堂で教えていた門下生が、そのまま韓南学堂小学科の生徒となり、漢文を兼修することになったのである。こうして韓南学堂は、日本式の寺子屋と韓国式の書堂を合わせた形となった。

翌32年7月頃の生徒数は33名であった。その内訳は、本科（第1学年）9名、小学科（第1学年）23名、漢文科（小学科の兼修）20名、特別科（日本人）1名であった。生徒の年齢は、「韓南学堂々則」第八条によって「本科十八歳以上三十歳以下、小學校十歳以上十八歳以下」とされていたが、当時はこれよりもやや幅があり、最年長31歳、最年少8歳で（ただし、10歳以下は見習生）、25歳以上が2名、20～24歳が4名、15～19歳が13名、14歳以下が14名という年齢構成であった。また生徒の出身階層は、中人4分、平民6分の割合で、その多くは農商民の子弟であり、故に家業の傍ら就学する者も少なくなかった<sup>24)</sup>。

その後暫く、生徒数30名台の時期が続く。明治32年「十二月下旬に至りては生徒増加して三十五名となり成績亦た見る可き者あるに至れり」<sup>25)</sup>、33年6月、「今や生徒三十名以上に達し修業の成績も頗る良好」<sup>26)</sup>といった資料がその裏付けである。

明治33年12月末には生徒数が40名に達していた。その学科別内訳・年齢構成・出身階層などは次のとおりである。

生徒は本科八名小学科三十二名合計四十名にして漢文科には本科小学科よりの兼修者二十五名あり年齢は最長三十二歳最幼九歳にして平均十六七歳のもの多きを占む其十歳未満の者は父兄の懇望に依りて見習生として習學せしめ居れるなり是等生徒の身分は兩班一，中人三，平民六の割合にして中には進士，先達等の稱を有する者ありと雖も多くは土着農商民の子弟なれば家業の傍ら就學せる者勤しとせず去れど又た忠清道定山，同扶餘，全羅道礪山，同咸悅等の地方より特に來校せる留學生五名ありて尚ほ漸次に増加せんとする傾向あり<sup>27)</sup>

32年7月頃と比較して、生徒の学科別比率や年齢構成は大差ないが、少数とはいえ兩班の子弟が含まれていたこと、また、周辺地域からの「留學生」が現れたことが注目される。これすなわち、「附近各地の人民が本校及本邦人に對する尊信の度を高め來れる徵證」<sup>28)</sup>に他ならない。

明治34年12月末現在の生徒数は45名で、確実な数字としてはこの時が最高であった。ちなみにその学科・学年別内訳は、普通科第3年級6名，第2年級4名，第1年級2名(小計12名)，小学科第3年級5名，第2年級12名，第1年級16名(小計33名)，平均出席者数は35名であった。また生徒の年齢は、普通科33~13歳(平均20歳)，小学科16~6歳(平均11歳)，出身階層は、兩班の子弟2名，商家の子弟22名，農家の子弟24名であった<sup>29)</sup>。

生徒数は、その後もずっと40名台で推移したようで、明治37年3月には42名の生徒，38年1月には40余名の登校者，38年12月には40余名の生徒があった<sup>30)</sup>。このうち38年1月だけは、在籍生徒数でなく登校者数であり、先にみたように34年12月末，生徒数45名時の平均出席者が35名であったことからすると，40余名の登校者があった38年1月が，あるいは生徒数のピークであったかもしれない。

一方、韓南学堂には「学友会」という組織があった。これは、学堂内外の韓国青年の修養を目的とした一種の社会教育機関であり、明治37年秋以来毎月3回学堂に集会し、薬師寺学堂長の学術講話を聞くのを例とした。同時に、会員の演説会をもつこともあった。会員は、38年1月当時54名<sup>31)</sup>，出席者は、毎集会30~40名の盛況であったという<sup>32)</sup>。

なお、日本人子弟については、これまで随所に述べてきたので改めて言及はしない。ただ韓南学堂が、日語学校本来の教育のみならず、前述した巡回訪問や学友会を通じての社会教育、さらには特別科における日本人教育など複合的な機能をもっていたことをここで強調しておきたい。

韓南学堂教科課程表 (明治 32 年 7 月当時)

本 科	第一 学 年	第 二 学 年	第 三 学 年
修 身	人倫道德の要旨	同 上	同 上
読 書 書 取	仮名, 仮名文, 近易なる漢字交り文	漢字交り文	同 上
作 文	仮名文, 近易なる漢字交り文, 日用書類	漢字交り文, 日用書類	同 上
会 話	単語, 短句, 近易なる日用談話	講話演説	同 上
算 術	加減乗除 (筆算, 珠算)	分数, 小数, 比例, 百分算 (筆算), 加減乗除 (珠算)	比例, 百分算, 開平開立 (筆算)
地 理		韓国地理大要, 日本地理大要	万国地理大要
歴 史		韓国歴史大要, 日本歴史大要	万国歴史大要
理 科		博物及理化学大要	天文, 地文, 生理, 衛生学大要
講 話	百科講話	同 上	政治, 法律, 経済, 教育, 実業等ノ大意
体 操	普通体操, 兵式体操, 軍歌	同 上	同 上

小 学 科

課 目	第 一 学 年	第 二 学 年	第 三 学 年	第 四 学 年	第 五 学 年
修 身	人倫道徳の要旨	同 上	同 上	同 上	同 上
読 書 書 取	仮名, 仮名文, 近易なる漢字交り文	仮名文, 近易なる漢字交り文	漢字交り文	同 上	同 上
作 文	仮名文, 近易なる漢字交り文	同 上	漢字交り文, 日用書類	同 上	同 上
習 字	仮名, 近易の漢字交短句, 日用文字 (階行)	近易の漢字交短句, 日用文字, 日用書類 (行)	日用文字, 日用書類 (行草)	日用文字, 日用書類 (行, 草)	同 上
会 話	単語, 短句, 近易なる日用談話	近易なる日用談話	談話	同 上	談話, 演説
算 術	加減 (筆算)	加減乗除 (筆算珠算併用)	加減乗除分数ノ初歩 (筆) 加減乗除 (珠)	加減乗除, 比例, 分数小数 (筆) 加減乗除 (珠)	比例百分算 (筆) 加減乗除 (珠)
地 理			韓国地理初歩	韓国地理の大要	日本地理大要 万国地理大要
歴 史			韓国歴史初歩	韓国歴史大要	日本歴史大要 万国歴史大要
理 科			博物学初歩	同 上	博物, 理化, 生理, 衛生学大要
講 話	百科講話	同 上	同 上	同 上	同 上
体 操	遊戯及普通体操軍歌	同 上	普通体操, 兵式体操, 軍歌	同 上	同 上

#### 4. 教育内容

韓南学堂の教育目的は、前述したように「韓國の内地を啓發し以て聊か隣邦の文化に資せんとする」ところにあったが、「韓南学堂々則」第二条は、これを具体的に、「本学堂は日語を以て日常緊要の諸學科を教授し社会の急需に應ずる人材を養成せんことを期す」としている。「日常緊要の諸學科」とは、いわゆる普通学を指す。

しかし、日本語を以て教育する以上、生徒にまずこれを習得させる必要があったから、開設当初の教育内容は、当然のことながらほとんどが日本語関連科目であった。開校9ヶ月後の明治32年7月当時の資料によれば、各科の毎週授業時間数は、本科（第1学年）が修身1、読書・書取6、会話6、作文2、算術3、小学科（第1学年）が修身1、読書・書取5、作文2、習字2、会話6、算術2で、本科・小学科とも、これらの科目のほか講話および体操を随時課した。授業時間を1日3時間、1週18時間としたのは、教室の不備と教師不足のためである<sup>349</sup>。

32年7月当時、本科・小学科とも生徒は第1学年のみであったが、すでに第2学年以上の教育課程も編成されていた。全学年の教科内容を示せば左表のとおりである<sup>349</sup>。

これによれば、本科は第2学年、小学科は第3学年から地理・歴史・理科が加わっており、「日本語による普通学」の比重が大きくなっている。だが、普通学、なかんずく「算術等の如き思考を要する學科」の教育は、日本語に比較して困難だったようである。明治33年末の韓南学堂報告には次のような一節がある。

開校當時に入學したる者は明年十月を以て卒業すべき豫定にして既に普通の日本語を綴り簡易なる日本文の読み書き及び普通學の一班を習得するに至れるが教育殆んど絶無とも云ふ可き未開の内地にして半ば好奇心に因りて就學せし蒙昧なる土民の子弟としては其の成績良好を以て目す可きものあり唯既往の經驗に徴するに長幼を問はず讀書及び會話には頗る巧なるも作文及び算術等の如き思考を要する學科には甚だ拙なるが如し<sup>350</sup>

明治34年、それまでの本科が普通科と改称されるとともに、小学科は5年制から3年制となった。したがって、先にみた32年7月当時の教科課程の第3学年以上は、實質上青写真だけに終わったことになる。新カリキュラムにおける各

科の教科目は次のとおりである。

普通科：修身、読書、算術、地理、歴史、理科、会話、作文、体操

小学科：修身、読書、会話、算術、体操

すなわち、小学科は、普通科の予備門としての性格がより強くなり、従来の5年制小学科で教えられていた作文と、教えられる予定であった地理・歴史・理科は、普通科だけの教科目となったのである。このほか習字・書取・講話が、独立の教科目ではなくなっている。

このように普通科・小学科とも教科目の整理が図られたわけであるが、1日3時間（漢文科は、普通科・小学科の始業前および終業後、小学科生徒をして履修せしむ）という授業時間数は従前のおりであったので、新たに設定された教科目それぞれの比重が変化したことは当然考えられる。とくに、全体として普通学の充実に一層の力点が置かれたであろうことは、次のような「授業の方針」から充分推測できる。

日本語によりて簡易なる普通學を授け内地に於ける韓人子弟の常識を啓き獨立自營の重んずべきを知らしめ職業に必要な智識を發達せしむるは本學堂設立以來の方針なり凡そ韓人の通弊として官を尊び民を卑しめ職業を輕んじ勞働を厭ひ權勢に誇りて遊食せんことを好み而かも力學を嫌ふ者比々皆然り去れば這種の教育の困難なるは實に名狀すべからずと雖も歲月を經過するに従ひ生徒をして漸次に斯かる通弊を脱せしめ職業を重んじ獨立自營の要を知り陋習迷想を去る者あるに至れるは事實なり<sup>36)</sup>

このような方針に基づいて行われた「各科授業の實況」は次のとおりであった。これによって、明治34年当時の韓南学堂における各教科の内容・程度・教育方法などを知ることができる。

修身は口授とし小学科には日常の禮儀作法を教へ普通科には人倫道德の要旨を授く通じて韓人の通弊たる清潔を尊ばず規律を重んぜず職業を厭ひ座食を好み仕官を以て唯一の希望となし獨立自營の精神に乏しき弊を匡正せんことを勉め各科中此課の教授には最も意を注げり授業時間は少きが如しと雖も各課共凡て此方針に依りて教授し漸次其効果を收めつゝあり、○讀書は小学科は尋常小學讀本普通科は同上及高等小學讀本に依りて作文會話をも之れに關聯して教授し普通科生には成るべく筆記せしむることとなせり本課は各課中教授比較的容易にして進歩亦た見るべきものあり普通科第三年生に至りては普通の漢字交り文を容易に讀むことを得日本字新聞の簡單なる雜報位

は理解するに難からず、○算術は日本語にて數へ方より始め四則分數比例に及び勉めて日常の算數に熟せしめ兼ねて理解力を養ふを旨とす本課は教授上最も困難を感じるころなるが普通科三年生に至りては通常の四則問題位は可成りに理解し且運算し能ふ○地理及歴史は普通科より始め地理は地球總論より朝鮮東洋萬國地理の大意に及ぶ此課は生徒の智見を開くに於て最も効あるを見る歴史は朝鮮東洋萬國歴史の大意を授け兩課共讀書力に併行せしめ各々筆記せしむ、○理科も亦た普通科より始め主として自然界の理法を示し韓人の迷信誤想を醒覺することに注意し動植礦物の初歩及自然の現象より普通器械の構造人身の生理衛生大要等に就き極めて卓近の實例によりて教授す理性に乏しく迷信誤想の多き韓國學生の爲には最も有益にして趣味を感じしむること亦た著しきが如し、○會話は主として日常談話に習熟せしめ同時に各課の練習を計るを勉む故に各課の教授は多くは談話体によりて筆記せしめ自ら會話に習熟するの機會<sup>(77)</sup>を能ふはじめは日常の單語短句よりし漸次に稍々高尚なる實用談話に及ぶ生徒は最も會話を好み進歩も亦た良好にして普通科三年生にては日常の談話通譯等に差支なき迄は發達せる者あり、○作文は讀書會話に關聯せしめ書牘文をも交へ主として言文一致体の文章を綴らしむ其進歩は會話に次げり、○體操は主に小學科に課し遊戯及普通體操の初歩を授く時々郊外に於て運動會を催ふし身體の健康を計ると共に活潑なる精神を養成せんことを勉む然るに此國の習慣として體操の如きは幼兒の爲すこととし青年生徒には之を嫌厭するの風あり、○附屬漢文科は父兄との連絡を圖る必要上より開設せるものにして地方に於ける書堂の習慣を其儘に適用し其狀恰も我國舊時<sup>(78)</sup>の寺小屋に類し授業は凡て副教師に一任せり現今在學生の修むところは千字文、童蒙先習、通鑑、小學等にして素讀を主とし釋義習字を加ふ<sup>79)</sup>

上の資料に「讀書は小學科は尋常小學讀本普通科は同上及高等小學讀本に依りて……本課は各課中教授比較的容易にして進歩亦た見るべきものあり」とあるのが、韓南学堂のレベルを測るよすがとなる。つまり、比較的教育が容易であった讀書にして日本の小学校レベルだったことから、他教科はそれ以下だったというわけである。当時の韓国人には馴染の薄い普通学、しかもすべて日本語による授業では、それも無理からぬところであつたらう。

とはいえ、韓南学堂の教育活動は、江景一帯における日韓人間の感情を融和し社交上・通商上直接間接に貢献するものであつた。これこそが、韓南学堂の眞の目的であつたといつてよい。これに関して、明治34年12月末の韓南学堂報告が述べているところは次のとおりである。

設備の不完全なると土民の蒙昧なるとによりて困難を感じることは以上の如しと雖も又一方には甚だ希望の屬すべきものあり生徒學事の進歩の如き人民感情の變遷の如き



は即ち其一なりとす本學堂の創設以來之れに依りて日韓人間の感情を融和し社交上通商上に資するところあるは豫期外の好果として表白するを憚らざるなり元來錦江流域の人民は性質頑迷にして奸智に長じ古より排外の思想盛んにして少くとも外人を輕視侮蔑するの風あり從來我行商者の如きも常に堪へ難き困難に遭遇して些の威信だに保ち得ざるの状態なりしが本學堂創設の頃より日本人の在留者も漸く其數を増し従つて彼我の交際繁きを加へ相互の事情疏通するに至り本學堂の事業と在留民の増加は相待つて日本人の信用と勢力とを増加し來つて厚意を以て我に對する者益々多きを加ふるに至れり左れば今日の狀態にして着々事業の進歩を計るを得ば當初の目的を達し各般の好果を收むることの不可能事に非ざるを知ると共に益々事業を擴張して大に地方人民教化の實を擧ぐるは極めて緊要にして且つ最も有望なることを信ず<sup>38)</sup>

明治35年度以降の教育内容については、遺憾ながら資料を全く見出しえない。上述したように韓南学堂は、その後財政難を脱した、あるいは逆に決定的な困窮に陥った形跡がなく、生徒数の大幅増減もなかったことからして、恐らくはほぼ34年当時の態勢を維持したのではないかと思われる。

参考まで、教育内容に多少とも関連するものとして韓南学堂の試験および休日に関する堂則の条文を次に示しておこう。

第七條 試験は學期、學年、卒業の三種とし學年試験及第者には修業證書を、卒業試験及第者には卒業證書を授與す

第十條 本學堂の休日左の如し

日曜日、開國紀元節、萬壽節、日本名節及日曜は各一日

夏期休業及冬期休業は各三十日

なお、藥師寺知麗がキリスト教徒であったことは第1章の冒頭部分で触れたが、韓南学堂の教育内容にキリスト教的な色彩を見出すことはできない。

## おわりに

旧韓末の日語学校の教育には、総じて次のような特色があったといわれる。

- (1) 韓国人庶民子弟を主としてその対象としたこと、
- (2) その教育内容は、日本語を媒介として、近代的社会生活のための近代的知識、つまり言うところの「普通学」を授けたこと。ただし、最末期には、日本語そのものの道具的教授に偏していった。
- (3) 日本語の普及に貢献したこと、

- (4) 波紋的効果とでもいうか、日語学校の子生み現象がみられ、その意味では師範教育的効果をもっていたこと、
- (5) 併合後の近代学校の前身となる役割を果たしたこと<sup>39)</sup>

以下、これらの点について韓南学堂の場合を改めて検討してみよう。

韓南学堂は、その位置した江景の地が地方政治上の要地ではなかったので、両班・官僚等は元々極めて少なく、生徒は自ずから農・商家の子弟が中心とならざるをえなかった。具体的に生徒の階層別比率を示せば、明治32年7月頃中人4分、平民6分、33年12月末当時両班1、中人3、平民6の割合であり、34年12月末現在では両班2名、商家22名、農家24名であった。ところで、代表的日語学校であった京城学堂では自称「官吏の子弟」が異常に多かったが、そこには、「此中官吏ノ子弟トアルハ現在官吏タル者ノミニハアラズ、其ノ祖先中ニ一時官吏タリシ事アリシ者ニシテ現今ハ商農ヲ営ム者モ少カラズ、乃チ有名無実ノ者多シト知ルベシ、概シテ云フ時ハ商農ノ子弟多数ニ居ルベシ、然レドモ一般ニ其ノ身分ヲ明言スルヲ厭フノ風アリ、是レ官吏ノ子弟ノ多数ナル所以ナリ」<sup>40)</sup>という事情があった。これから類推すると、韓南学堂の「両班」や「中人」は京城学堂の「官吏」と同類であり、実際には農家あるいは商家の子弟が大部分であったと思われる。

韓南学堂の教育内容は、日本語を以て「日常緊要の諸学科」を教授することを旨とした。開校当初は、必然的に日本語関連科目に授業時間のほとんどが割かれたが、学科が再編成された明治34年あたりから、少なくとも教育課程の上では本来の軌道に乗ったようである。しかし、普通学の水準はそれほど高くなかった。教育が比較的容易であったといわれる読書科の教科書が日本の尋常・高等小学読本であったことからして、普通学は、これ以下の水準だったであろう。韓南学堂の明治35年度以後の教育内容は不明である。したがって、「最末期には、日語そのものの道具的教授に偏していった」かどうかは証明しえない。

韓南学堂が日本語の普及に貢献したことはいうまでもないが、その量的指標となる生徒数をみると、開校当時は6名、明治31年末には20余名となり、おおまかにいって32～33年は30名台、34年以後は40名台であった。ただし韓南学堂は、社会教育の手段として巡回訪問・講話会・印刷物配布などを行い、また校外生をも含めた校友会の組織もあったので、生徒数の少なさに割に日本語普及への貢献度は大きかったといえるであろう。

子生み現象としては、明治38年12月、韓国人有志の要請に応じて韓南学堂分

校魯城論山忠仁学校が開設された。また、明治31年10月に設立された韓南学堂は、錦江流域一带における日語学校の先駆であり、続いて32年9月には全州に三南学堂が、33年1月には公州に湖西学堂が設立された。この意味で、三南学堂と湖西学堂の設立は、韓南学堂の間接的子生み現象であったとみることもできよう。

以上みてきたように韓南学堂は、日語学校の5つの基本的特徴のうち少なくとも4つの要件は備えていた。いつまでどのような形で存続したかをはじめ、創立以来の具体的な教育活動についても不明な部分が多いが、典型的な日語学校のひとつであったことは事実である。

## 註

- 1) 韓南学堂報告 「韓南学堂の来歴及現況」『東亜同文会報告』第15回 明治34年2月1日 p. 23
- 2) 同上, 同上 p. 15
- 3) 小川圭治・池明観 編 『日韓キリスト教関係史資料』新教出版社 1984年 pp. 130-131
- 4) 雑録 「韓南学堂沿革概要」『東亜時論』第16号 明治32年7月25日 p. 23
- 5) 前掲 韓南学堂報告『東亜同文会報告』第15回 pp. 21-22
- 6) 前掲 雑録 『東亜時論』第16号 p. 24
- 7) 「韓南学堂の現況」『東亜同文会報告』第27回 明治35年2月1日 pp. 16-17
- 8) 同上, 同上 p. 20
- 9) 前掲 韓南学堂報告 同上 第15回 p. 18
- 10) 中井喜太郎 「朝鮮に於ける本邦居留民の教育」『教育公報』第268号 明治36年2月 p. 19
- 11) 薬師寺知胤 「江景通信」『東亜同文会報告』第44回 明治36年7月10日 p. 55
- 12) 韓南学堂 「江景通信」 同上 第70回 明治38年9月 p. 24
- 13) 本会記事 「韓南学堂報告」 同上 第74回 明治39年1月26日 p. 28
- 14) 雑録 「韓南学堂ノ状況」『東亜時論』第16号 p. 22
- 15) 「韓南学堂の現況」『東亜同文会報告』第27回 pp. 19-20
- 16) 「韓南学堂補助」 同上 第8回 明治33年6月25日 pp. 4-5
- 17) 1) に同じ
- 18) 薬師寺知胤 「江景通信」『東亜同文会報告』第53回 明治37年4月10日 p. 36
- 19) 雑録 「韓南学堂ノ状況」『東亜時論』第16号 pp. 21-22
- 20) 徐文手に関して 第27回『東亜同文会報告』には、明治33年7月1日「生徒徐相文を助手に採用す」とあるが (p. 15), 註19) の『東亜時論』記事が 明治32年7月付であるところから、33年は誤りであろう。
- 21) 前掲 韓南学堂報告『東亜同文会報告』第15回 p. 20
- 22) 「韓南学堂の現況」 同上 第27回 pp. 17-18
- 23) 韓南学堂 「江景通信」 同上 第63回 明治38年2月 p. 37
- 24) 雑録 「韓南学堂ノ状況」『東亜時論』第16号 pp. 22-23

- 25) 前掲 韓南学堂報告『東亜同文会報告』第15回 p. 17
- 26) 「韓南学堂補助」同上 第8回 p. 4
- 27) 前掲 韓南学堂報告 同上 第15回 p. 20
- 28) 同上, 同上 p. 25
- 29) 「韓南学堂の現況」同上 第27回 p. 16  
出身階層別の合計は生徒数と一致しないが、数値はすべて原典のままである。
- 30) 薬師寺知驪「江景通信」同上 第53回 p. 36  
韓南学堂「江景通信」同上 第63回 p. 37  
本会記事「秋季大会」同上 第74回 p. 23
- 31) 韓南学堂「江景通信」同上 第63回 p. 37
- 32) 本会記事「秋季大会」同上 第74回 p. 23
- 33) 雑録「韓南学堂ノ状況」『東亜時論』第16号 p. 22
- 34) 雑録「韓南学堂教科課程表」同上 pp. 25-26
- 35) 前掲 韓南学堂報告『東亜同文会報告』第15回 p. 21
- 36) 「韓南学堂の現況」同上 第27回 p. 17
- 37) 同上, 同上 pp. 18-19
- 38) 同上, 同上 p. 21
- 39) 阿部宗光・阿部 洋 編『韓国と台湾の教育開発』アジア経済研究所 1972年 p. 41
- 40) 渋沢青淵記念財団竜門社 編『渋沢栄一伝記資料』第27巻 渋沢栄一伝記資料刊行会 昭和34年 p. 78